大学教育学会　課題研究活動報告書（2023 年度）

提出日　2024 年　3 月　25 日
報告者　塚　原　修　一

課題研究テーマ	コロナ禍がもたらす大学教育の可能性～対象・方法・内容～
代表者（所属）	塚原修一（関西国際大学）
メンバー（所属）	サブテーマ 1：塚原修一（関西国際大学）、濱名篤（関西国際大学）、山田礼子（同志社大学）、川嶋太津夫（大阪大学）、森利枝（大学改革支援・学位授与機構）、白川優治（千葉大学）、深澤晶久（実践女子大学） サブテーマ 2：千葉美保子（甲南大学）、村上正行（大阪大学）、岩﨑千晶（関西大学）、川面きよ（成城大学）、浦田悠（大阪大学）、遠海友紀（東北学院大学）、嶋田みのり（東北学院大学）、多田泰紘（京都橘大学）、石井和也（宇都宮大学）
担当理事	白川優治
コメンテイター（所属）	溝上慎一（桐蔭横浜大学）
実施した活動	2020 年以降、新型コロナウイルス感染症により、オンラインによる非対面授業が大学に余儀なく広まった。こうした状況における大学教育の可能性をさぐるために、本課題研究では学生の学習を支援する学習環境デザインと学修成果の評価を取り上げた。2 つの異なる接近法を並列させて、サブテーマ 1「非対面大学教育における学修成果の評価」と、サブテーマ 2「ニューノーマル時代における学習環境デザインモデルの構築」の研究をすすめ、教育実践研究の専門家をコメンテイターに迎えて両サブテーマの連携と統合の推進をはかった。 サブテーマ 1 では本年度の活動として、前年度から継続した国内の先行事例調査と、本年度に着手する量的調査を計画していた。第 45 回大会ラウンドテーブルでは前者について 3 事例を取り上げた。2023 年 5 月からコロナ後の時代となり、大学の対面授業が復活した。これをふまえて、量的調査の視野をコロナ後に拡張して課題研究をしめくくることにした。すなわち、調査対象を学生から教員に変更し、コロナ前、コロナ下、コロナ後の大学教育活動の対比を調査の主題として、本学会会員を対象とした大学教員調査を実施した。課題研究シンポジウム I はその結果を中心に構成し、あわせてサブテーマ 1 のまとめを述べた。 サブテーマ 2 では、本年度の活動として、前年度に実施したインタビュー調査の分析を継続して実施した上で、これまでの活動成果として、ラーニングコモンズをはじめとした学習スペースの設置、運営、改善に携わる教職員や学生スタッフが、その方針を確認、評価、修正するときに活用可能な「学習環境デザインブック」の開発に着手した。その中間報告として第 45 回大会ラウンドテーブルにてデザインブックの構成案および拡張版 LSRS の試行結果を報告した。課題研究シンポジウム I では、サ

	ブテーマ 2 のまとめとともに、「学習環境デザインブック」の試作を公表した。 　両サブテーマの連携と統合については、2022 年度の成果をふまえて、関心が重なる部分と、サブテーマごとに役割分担がなされた部分を整理して考察を深め、その結果を塚原・濱名による課題研究シンポジウム報告（学会誌 46 巻 1 号に掲載予定）の一部に盛り込んだ。
成果	第 45 回大会ラウンドテーブル 20「コロナ禍がもたらした大学教育の可能性」（2023 年 6 月 3 日）。サブテーマ 1 の成果の一部を報告した。 中村　仁「オンライン産学官連携グローバル PBL の事例」 栗本博行「世界標準の経営教育」 山田礼子「対面式への回帰とともに DX を活かす関西大学の事例」 学会誌 45 巻 2 号にその報告として、塚原修一ほか「コロナ禍がもたらした大学教育の可能性」を掲載した。 　同ラウンドテーブル 21「ニューノーマル時代の学習環境をデザインするには―学習環境ハンドブックの開発と拡張版 LSRS の試行報告」（2023 年 6 月 3 日）。サブテーマ 2 の成果の一部を報告した（現在はデザインブックに改称）。 嶋田みのり「学習環境ハンドブックの開発」 多田泰紘「拡張版 LSRS の開発」 石井和也「拡張版 LSRS の施行（1）」 千葉美保子「拡張版 LSRS の施行（2）」 学会誌 45 巻 2 号にその報告として、千葉美保子ほか「ニューノーマル時代の学習環境をデザインするには―学習環境ハンドブックの開発と拡張版 LSRS の試行報告」を掲載した。 　2023 年度課題研究シンポジウム I「コロナ禍がもたらす大学教育の可能性～対象・方法・内容～」（2023 年 11 月 12 日）。司会：川嶋太津夫、報告：村上正行、嶋田みのり、千葉美保子、白川優治、森利枝、山田礼子、塚原修一・濱名篤、コメンテイター：溝上慎一。学会誌 46 巻 1 号に以下を掲載予定。 塚原修一「課題研究シンポジウム I の趣旨説明」 村上正行「学習環境の評価指標の開発・活用とインターネット上の学習環境の検討」 嶋田みのり「学習環境デザインブックの開発―学習支援のデザインを中心に」 千葉美保子「ニューノーマル時代に対応する学習環境・学習支援のデザイン―サブテーマ 2 のまとめと今後の展望」 白川優治「「コロナ後の大学教育に関する調査」からみた大学教育の現状」 森　利枝「コロナ禍をへた大学の授業と学生の評価―学生の学習量の観点から」 山田礼子「コロナ後の大学教育と今後の改善―教員調査と事例調査を参考に」

	塚原修一・濱名　篤「コロナ禍がもたらした大学教育の今後の可能性―サブテーマ 1 と課題研究のまとめ」 川嶋太津夫「司会による総括」
残された課題	課題研究の報告書を次年度にまとめる予定である。 課題研究は「大学教育の研究と実践」（課題研究の選定及び評価に関する内規）に取り組むものである。この点からこれまでの活動内容をみると、サブテーマ 1 は事例の調査研究に注力して実践が残された課題となる。サブテーマ 2 では、コロナ以前以後の大学学習環境の状況整理と企画・運営上の要点の抽出を目的として 10 大学・キャンパスへの聞き取り調査を行った。そこで得られた知見を評価システムの開発に活用し、事例となる大学において評価を試行した。より多くの大学への適用ないし普及が残された課題となる。